

食物アレルギーを抱えた生活

鳥生クリス

「お母さん、このチョコレート食べてもいいの。」

ほとんどの親にとってこの問いかけはいつものことで、返事もしやすい。「いいよ、晩ご飯の前でなければね。」と、また、そうであれば「だめ」と。でも私の家族には、これは危険な質問なのです。

なぜかという、私の長男はナッツアレルギーがあるからです。特に、彼には深刻なピーナツアレルギーがあります。ほんのわずかのピーナツでも彼を死に至らせるのです。怖い物です！おやつや時間やアレルギーが起きるどんなときにも、息子の食べる食事やパッケージに潜む、命に関わる危険が満ちているのです。

私にも、家族の誰にもアレルギーはありません。それで、彼が1歳過ぎのとき、私のピーナツバターを塗ったトーストを少し彼に食べさせました。数分でじんましんが出、赤くなり、かゆくなりました。救急室へ運ばれ、ピーナツアレルギーと診断されました。その時は致命的なアレルギーではなかったのですが、まだピーナツを避ける必要がありました。それから数年間は、ピーナツを避けるのは簡単でした。しかし小学校に入ると、一ヶ月に何度か給食にピーナツや他の種類のナッツが入っていたのです。学校にはそのことは伝えてあり、ナッツが入っている日は、彼にはちがうメニューが用意されていました。学校が始まって一ヶ月後、息子の担任の先生は、35人の1年生を統率しようとしていて、その日の給食にピーナツが入っているのを忘れていました。そして息子はそれを食べたのです。給食のあと、息子がアレルギー反応を起こしたという連絡を受けました。私は急いで学校へ行き、いつも携帯している抗ヒスタミン剤を投与したので、直ぐに正常に戻りました。1週間後、運悪く、彼はいつこの家でたまたまピーナツが入ったチョコレートを食べたのです。彼らはピーナツが入っていることに気づき、急いで自宅へ帰ってきました。私はまた、その薬を飲ませました。しかし、息子は直ぐにのどがかゆいと言いました。私たちは医者に診せた方が良く判断しました。幸運な事に、息子のアナフラキシーショックが起こる前に病院に着いたのです。息子の血圧は異常なほど低い状態でした。もし息子を病院に連れて行くのを少しでも躊躇していたら、彼は生きてはいなかったでしょう。息子のアレルギーは2つの症状、適度の軽い症状ととてつもなくひどい症状がとなり合わせに存在し現れるらしいのです。

それで今では私たちはかなり用心しなければならなくなりました。全ての表示を読むこと。成分だけでなく、同じ工場内でピーナツで作られた製品がないかを見極めるために、どのパッケージの細字の部分までも読まなければなりません。前に述べたように、どんな小さなかけらでさえも息子の致命傷となります。もし少しでも疑わしければ、息子は食べません。そのことは息子には時として難題となります。お祭りや行事でお菓子をもらったときには、全てチェックしなければなりませんし、たくさんは食べられません。なぜなら、パッケージに成分の情報が十分には書かれてないし、ピーナツが入っているかどうか分からないからです。最近、私たちは誕生日のケーキが用意されたあるパーティに参加しました。でも、息子にはケーキがありませんでした。どうしてかという、そのケーキがどこで作られ、また何が入っているかわからなかったからです。レストランへ行く場合も気を付けなければなりません。カナダへ里帰りするときには、彼のために食べ物を持っていかなければなりません。

多くの人たちが、息子は成長したらこのアレルギーはなくなるだろうと言います。いいえ、そんなことはないでしょう。アレルギーはなくなるには厳し過ぎる病です。それで私たちはエピペンを持っています。エピペンは、材料がピーナツだとわかり、アナフラキシーショック状態になった場合に、息子が自分で投与できるアドレナリンの注射薬です。この注射は心臓の鼓動を続けさせる働きがあります。病院へ着くまでの応急処置剤となり、症状を反転させる効果があります。

恐ろしいことだと思うでしょうね。本当に怖いのです。でも、一般的には毎日の生活の中で、小麦や大豆アレルギーに比べると、息子の発症リスクは限られています。数年前に今治市は、給食でのピーナツの使用を禁止しました。それからは、彼は給食を食べることができるようになりました。普通の日本食にはピーナツは含まれていません。それで、たまには、焼き肉やパスタはピーナツが含まれる危険性がかなり低いので、レストランで外食をします。店で買うお菓子の多くは、ピーナツを扱う工場で作られています、どのメーカーが安全かを私たちはよく知っています。



私の母国のカナダと比べると、日本ではアレルギーに対する意識がまだ低いようですが、少しずつ変わってきています。残念なことに、アレルギーは増えてきているようなので、もっとアレルギーについて考える必要があります。どういうことかということ、食べ物を出すときに、「アレルギーはありませんか。」とたずねるということです。こうすることで、私たちの状況はより安全になるので、ありがたく思っています。そして息子は、私が「いいよ、このチョコレート食べても。」と言えるかどうか、スリルに満ちているのです。

訳: 宮崎千代子 (Chiyoko Miyazaki)